第五百廿一號目次

◎社　説

時大小觀（催眠術容易く行はる◎醫術甚だ効なし◎華族居邸の煉瓦塀◎待合風茶室◎復活に非ず新生なり◎讀書人及び事務家◎音樂會と教會堂◎離間流言横行す◎支那人の外國保險會社◎戀愛談、成功談）

◎随　感

松の化粧◎秋天の掬雲◎戀ひしき蟲よ◎月よ、月よ◎月の恥かしさよ◎秋のねがひ◎活動の詩◎紅顔の美少年◎鳥部山の煙、あだし野の露

◎女　學

女學生の不女子
昆虫學と家庭…………名和靖
料理道…………生間正起

◎光瀾之觀

記　録…………新井奥邃
泉叢團体の側面觀…………某

◎雜　録

舍監の四ヶ月（二）…………青柳有美
花子のなげき（完）…………中島湘煙
宇宙と人生及靈魂…………黒岩周六
自然と人工…………左ゞ女

第五百二十號（八月廿五日）目次

◎社説　文相論、生活難

◎随感　恥る者は空け、死する者は生く◎我、驍勇の娩兒なる哉◎萬古の倫友◎科學者の孤獨◎尊とき科學者◎何んぞ無雜作なる◎夏の朝た夕べ

◎女學　繼母の地位（二）夏の料理（生間正起）我薔薇園（森兒逸人）

◎光瀾之觀　記録（新井奥邃）

◎雜録　日本の古代彫刻（青柳有美）花子のなげき（故中島湘煙女史）厳の陰（大塚楠緒）ゲーテとカーライル（新渡戸稲造君）

◎時事　天使作兵◎動物虐待防止會◎英學熱◎演說會◎名古屋の女學◎江戸城明渡◎婦人の外部運動◎柳澤女史歸朝◎渡米倶樂部

第五百十九號（八月十日）目次

◎社說　日本教育の痛憂事、撤して同感同憂の人士に寄す、靜乎たる山林

◎隨感　鎮守の森◎我を措ての人世觀◎人世饒倖なし◎商道◎白雲の郷◎唯ひとり侶たれ

◎女學　繼母の地位、料理鹽梅の道（生間正起）

◎光瀾の觀　理想の男子（三）記録（新井奥邃）

◎雜録　花子のなげき（一）（故中島湘煙女史）舍監の四ヶ月（青柳有美）ゲーテとカーライル（新渡戸稲造）定見深睡録、痴情偶語（一）愛讀者投書宇宙と人生及靈魂に就て（黒岩周六君）

◎時事　雄辯の世再び來れり◎雄辯の基礎◎基督教の公認◎佛教一進化せり◎神道界は奈何ん◎當年の宗教家懇談會◎三教一家

期日	前金	廣告料	送金
毎月二回（十日、二十五日發行）	壹册定價　拾錢 半年分前金　壹圓拾錢 一年分同　貳圓 代金は總して前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事但し其節は總て一册十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ眞に不本意ながら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候	一行（十七字詰）一回　前金拾錢 一段　同　三圓半 一頁（三段）　同　九圓	送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割増にて計算せられたし

大賣捌

東京　東京堂
西京　勉強堂
大阪　文潤堂

明治三十六年九月十日印刷
明治三十六年九月十日發行

發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
發行所　東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地　女學雜誌社（特電番町千一番）
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍（電話新橋十八番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第五百貳拾壹號
明治三十六年九月十日發兌

社説

時大小觀

一葉の凋落、もつて悲秋の到來を知るべし。一聲の孤雁、もつて嚴霜の遠からざることを察すべし。たとひ、針小の穴によりて窺くとも、之を上にして仰がば其の望む所は天の高きなり、たとひ井の口によりて窺がふとも、伏して遠く眺むれば其の臨む所は地の深きなり。昔しは、童謠里聲によつて天下の興亡を卜するものあり、如今亦た此般の側面觀なしと謂はんや。題して、時大小觀と言ふもの、極めて淺小の流行に假つて、時勢の大潮を測らんとするに由る。

(一)催眠術容易く行はる

アムハラバより、熊嶽に至る迄、疑問喧傳少なからざりしが催眠術の漸やく起るに隨がつて、世人亦た漸やく問はずなれり、其の類似の多きが故なり。夫れ、催眠術の理解は、近世に至つて始めて盛んなれども、其の實行は古しへより之れ有り。たゞ其の應用せらるゝことの廣且つ奇なる、近時ことに喧すしきを以て名あり。

凡そ、英雄の群豪を駕御するより、豫言者もしくは宗祖等の多少の奇蹟に至る迄で、概して催眠術の理に由らざるはなし。お札、お水、及び賣藥等の靈驗の如き、素より之と同根の理に歸す、催眠術の據る所、決して斬新の妙に非ず。

然れども、近時に及んて、其の大いに行はるゝに至りたるもの、又尋常士人が僅かの工風によつて容易く之を施すことを得るに至りたるもの、別に理由なくんばあらず。他なし、世人が神經質の非常に昂進したれば也、意志の非常に薄弱となりたれば也、信仰を渴望する要求の非常に切迫したれば也。此時に當つて催眠術を施こす、其の行はるゝことの容易きは、論

一

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なきなり。

(二)醫術甚だ効なし

俳優田之助の足を切りし以來、西洋醫術の神効は、天下の目を聳だてて傾倒する所なりしが、今や一變、之に對する掛念不信の聲漸やく高くなれり。夫れ、醫術日進の跡頗ぶる顯著にして、其の緻密精細を增したるとは天下の疑はざる所なり而して其の治療の奏効に至つて反つて疑惧する所を增すは何故ぞ。今や、外科切割の術に於ては、尚些さか新變の妙を見すとありと雖ども、内科に至ては、殆んど無方無策の拙たるとを免れず、大抵緩漫遲鈍にして偏へに自然力の興奮を待つに過ぎず。凡そ何等の人術と雖ども、遂に自然に則とりて之に委任するを極意となすが故に、醫も亦た此の大道に歸せんと決して奇しむべきにあらずと雖ども、先づ人事を盡して而して後ち天命を待つにあらずんば、何を以て術の佳なるものとせんや。今の醫人は、生死二途の危機に立ちて自から責を負ひ、奮つて其の危ふきに斷行する底の慨ある尠なし。尤とも安全なる局量に藥りして、尤とも平凡なる施術を用ゆ、其の神効なき亦宜べならずや。

然れども、今の醫術を以て二十年前の醫術に比せば、誰か亦其の進步の洪大なるとを疑はんや、而して治績の反つて年と同に退步する所以は何んぞ。他なし、醫師自から醫術を信ずると昔日の如くならず、病者醫術を信ずると昔日の如くならず、醫師は其の施こす所の外に尚ほ良法もやあるべしと自から疑がひつゝあり、病者は其賴る所の醫師の外に尚ほ良醫あるべしと考がへつゝあり、醫師の批評眼は殊の外進步し、病者の神經質は驚ろくべく昂進せり、一言するに、施術と藥局と進步の少なきにあらず、疑問と不信と過神經との進步更に多きによつて、今の醫術如此く効なし。斯に於てか見よ、自然療法、水療法、空氣療法、摩擦療法、クリスチアン、サイエンス療法、及び種々の靈藥奇劑の漸やくにして天下に名を爲しつゝあるとを。

(三)華族居邸の練瓦塀

東京市中を散步するものは、嚴めしき瓦塀の所々に圍繞せらるるを見るなるべし。短かきも一二町を下らず、長きは七八

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

町に超ゆるあり、而して其の結構大抵新作にして近く二三年の間に落成したるとを見めすを觀ん。加之ず、從前、長屋建に建られたる貸屋を毀ち、わざ／＼其前に瓦塀を築くものすらあり。市街繁昌の地、一躰は閙ひの前にすら新らしく貸屋を建べきに今や反つて然らず。熱鬧の地、長城を廻らし、商家比隣の不便をすら厭はず。街上白壁を高くして意甚はだ驕れるが如きもの、近年殊に其の數を增したり。而して、其の門に近づき、其の門札を見ば、斯の如きものの十中八九は大率ぬ舊大名華族の屋敷たるとを知らんとす。

昔しは、江戸城下の大建築、三代將軍の後より創まれり。今は、華族、東京をもて永住の地と爲さんとに確定せる明治三十五年に於て決定せるとを知る也。是れ、維新前來の舊君臣大抵、死沒し、新らしき世主の今正に華めくが故也。然りと雖ども、日本をして英國の如くならしめ、華族をして貴族の如くならしめ、東京をして倫敦の如くならしめんとを希望するものは、恐らくは之に滿足せざるならん。而して、他日趨勢の之を驅つて、今の華族をして其舊藩地もしくは他の所領地に居城せしめ、東京を以て單に其の交際塲となさしむるの日なしと言はじ。只但だ未だ其の兆の破現するを見ざるのみ。

嗚呼、山林田野を樂しまず、之に近きものも數畝の園藝に過ぎず。高岳大澤の田獵を壯とせず、之に近きものも一二日の鴫打に過ぎず、馬に乘らずして、自轉車に乘り、槍を突かずして、玉を突く。汪濊寛潤の氣品なくして、都雅鮮細の才交あり。今の貴公子の態度抑そも是か非か。

（四）待合風の茶室

もし亦た紳商、才人、貴顯、名流等の家を訪はゞ、十中七八相似たる一種新式の新座敷に引見せらるるに會せん。此の式何の工みぞ、鎌倉か、足利か、奈良か、京都か、否な、一種異樣の混成式にして、昔し曾て無き所ろ也。もし冒稱して言はゞ、草庵的お茶屋、もしくは待合風茶室とせん哉。蓋し之に草庵の寂しき風雅のこもれるにはあらねど、錢をもて茶室らしく布置せる結構を存ず、同時に、艶にして便利なる、粋にして氣の利きたる、お茶屋もしくは待合らしき座敷の限取りあり。故に、わざとらしき風流と、窮窟らしき狹き

部屋と、作り立たる前栽とあり。而して、主人の極めて得意にして、甚はだ心得たるらしき光景は、必らず之に附属したる一種の「をかしみ」なり。

今や、謠曲流行せり、茶も流行せり、同時に待合入も流行せり、お茶屋も流行せり。方今士人の家居は此の混成式を見る亦た已むを得ざる也。

嗚呼、昔しは、文士町に戯むれ、粹翁市に遊び、遂に茶道をして平民の名に加味せしむ、則はち、待合、及び茶屋の稱あり。是寧ろ祇園、乞食の茶に饗せらるゝ風流の余韻也。知ず今の待合及び、茶屋と、利休道との混淆は何をか産する。

(五)復活に非ず新生なり

今若し松方伯にして何事か新らしき事業を起さば、玆に初めて松方伯なる經濟家あるヿを知るもの多からん、況んや若し高島子にして何事か思ひ切つたる變動を起さば、今日初めて高島子なる騷動家あるヿを知るもの多からん。蓋し、世は既に久しく此流の先輩を忘れたり。否な忘たるのみにあらず、之を記臆し之を掛念する面々は既に老朽家となりゆき、今の靑年の今の輿論に於ては、未だ曾て斯流先輩の功績を記臆したるヿあらざれば也。故にもし彼等にして之より更に活動せば、輿論に對しては寧ろ新たに生れたる也、決して復活にはあらず。

見よ、板垣伯の政治論に對して、今の靑年界の如何に遇するかを。板垣伯の彼等に於けるは、寧ろ社會改良家たりし也、自由論の率先家にはあらざりし也。此の意義に於て、誰か大井馬城を知れるものぞ。亦此意義に於て、河野廣中を知り、片岡健吉を知れるもの、抑そも幾何あるぞ。

人老ひぬれば、新たに相續するものは、赤子の成人したるもの也。此の成人は、自己の赤子たりしヿを回顧すれども、其の老人の壯年時代までを考ふるものにはあらざるべし。

試みに、今の中學以上、大學以下の靑年に會して、其の評論する處を聞き、翻つて、元勳、元老、先輩諸君子等の自負する所を比較せば、眞に抱腹に堪へざるものあらん。

(六)讀書人及事務家

第一期に於ては、官吏と商人とは、雲泥の關はりなりき。大

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

久保甲東によれる政府萬能の余波、久しく高騰せる時なり、第三期に於ては、官吏商人となり、商人官吏となり、其の關は至つて密接したりき。官吏の月給比較的低廉となりたり物價騰貴の余波、遠く流行せる時なり。之より幾小轉、今また截然として一新紀元に際會す

試みに、讀書家と、銀行會社員等と相對するを見よ。對等せる朋友なり。試みに、教師法師等と、事務家と相談するを聞け。互角せる談敵なり。以て、其の接近を知り、以て其の交接を知り、以て其の出處進退を知る。

(七)音樂會と教會堂

西洋音樂の流行、何んぞ盛んなるや。樂器の販賣と、音樂書類の賣れ行と、唱歌及び音樂の速成科の入學と、各所の音樂會の流行とを見ば、直ちに之を了せん。

別に宗教界を見よ。基督教に對する僻見は殆んど取去られたり。縣會議事堂、市會議事堂、もしくは、官公立の大中小學校に於て、基督教の說教を爲すとすら、大抵異論なきに至れり。而して、基督教に限らず、佛教にても、又哲學にても、議論に拘泥せざる信仰を得んとするの渴望は、今極めて猛烈となれり。

夫れ、宗教と音樂とは、歷史家の言へる如く、面倒なる理窟によりて結合するにあらず。其の大いに行はるる所則はち同一時勢なるが故也。論議に厭果てたるものは、音樂に行ん。議論に満足せざるものは、信仰に行かん。而して、信仰の歌ふ所ろ、音樂初めて美なり、音樂の感ずる所ろ、宗教初めて幽なり。天に於ては、宗教なくして音樂あらん、地に於ては音樂なくして宗教あらん。然れども、歌と、讃美と、祈禱と、感謝と、信仰とは、素と同一の聲なり。其の聲、衷心より出でて、天に聞え、其聲、管絃に和して、普ねく聞ゆ。音樂と宗教とは、双產同穴の伉儷なり。

(八)離間、流言、横行す

若し愚人のみなりせば則はち止む、假りに相當の思慮あるもの若干、露西亞もしくは或る某外國の要路に立つとあらしめよ。必らずや、其の戰かふに先だちて、其の入用の萬分一を散じ、自由自在に我國の世論を左右し得べし。

我國の世論斯の如く輕しと言ふものは、敢て自から同胞を輕んずるの謂にあらず。只だ日々の喧しき世論なるものゝ至つて重んじがたきことを評するのみ。

若し眞に戰かはんとせば、我國の世論をして非戰論たらしめん、之れ戰かふに利なれば也。もし眞に戰かふの意なくば、或ひは、主戰論をして尤とも過激ならしむるともあらん、之れ戰ひを防ぐに利なれば也。豈に只だ之のみならんや、其の論を左右するは至て易し。是れ、我同胞の錢に迷ふの故に由るにあらず、たゞ激して利害を忘れ易きが故也。

今や、同一政黨中に、互ひに狐疑あり。同一加盟中に互ひに流言あり。或は犬と呼び、其呼ばれたるを憤ふり、更に彌よ紛擾す。宛たる鑛毒地方の現象、如今延ひて全國に及ぶ。而して、其元因を探窮し、偏へに我同胞のみを責むるものあり、或ひは同胞の性格に付て失望するものあり、嗚呼、是れ、世界中の正直者にあらずや。

(九)支那人及び外國保險會社

横濱は言ふに及ばず、東京も。阪、神、は言ふに及ばず、京都も。長崎方面は言ふに及ばず、東北もポツリ〳〵支那人の行商を見ることを增加せり。

保險會社に於ては、舶來の三大會社、到る所ろに全勝を占つゝあり。無遠慮に日本人を雇使し、又無遠慮に之を取り換へ雇使し、壓令し、叱咤し、甘言しつゝ、あらゆる緣故によりて、あらゆる方面の手蔓をたぐりつゝあり。而して、最早や日本の保險會社をして、瞠若たらしめたり。

嗚呼、此の流勢、單に、小間物と、保險會社事業とに於て、已むべき乎。

(十)戀愛談、成功談

社會は一個の人なり、其の流行の變遷するは宛として齡ひの過ぎゆく如し。

流行の今の時期は、少年盛春の期を過ぎて、やゝ分別のつき初めたる頃と覺えたり。戀愛談頓かに止みて、正に成功談に急ぎつゝある也。たゞ此の成功談や、出世立身の經濟を多しとす。彼の藝術工風に於ての成功談未だ盛んならざるは素よりなり。流行の時期、いまだ老熟に達せざれば也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○松の化粧

植木師、前栽の松の葉をすかしつゝあり。落葉片々、泉石の間だに散りて、時ならぬ壇に左も似たり。何故に斯くもぎ取るぞと問へば、枝、玉指細腰の美を呈して、松の姿すゞしくなる故と應ふ。本邦武と禪との加味せし趣好は、松に於て現はるるを、此すら庭園に入りては可憐の姿になりゆくなりけり。

○秋天の痴雲

夏雲、奇峰あり、秋天、痴雲多し。仰ひで、之に戯ぶれ、之に吟ずる族、何處にありや、われ其侶を慕ふ。地文の風光、亦た美にして、山河の景言ひつくしがたき樂しみなきにはあらねど、外線固定して漠たらず、面貌堅結して軟らかならぬぞ吾が好みの上の憾みなる。茫々たり際みなく、翩々たり定まりなく、紫爛たり乍まち消え、墨水漫たり忽まち清む。其の征く所ろ極なりなく、之を望み之を思ひて望み彌よ悠たり。孰か、萬象を多しと云ふ、雲の象は萬物よりも多し。天馬、空を行き、飛龍隱見し、鮫鯨、泳ぎ、大岳聳ゆ。而して忽として細波趨り、白泉迸ばしり、小魚躍り、金砂散ず。英豪の矛を横たふるもの、佳人の裳を曳くものあり、羽衣烏帽して筆を握るものあり、立ちて舞ふもの、騎して叱咤するもの。而して忽として一天鯨波轟き、暗黑、光に幕ひき、雲壁八荒を塞ぎ、光景時々に變じ、色彩刻々にうつろふ。少焉して、雲よどみ、蒼烟、暮色と同もに下る。われ獨り惆として遠望し、哭して哀泣す。人よ、吾涙を笑ふ莫れ、吾は悲しきにはあらざる也。天心慈膓あり、秋色之をもたらす。旻天、情あり、鳥雀之を傳ふ。わが泣くは感謝なり。わが泣くは慰藉なり。ひとり聲を放つて長哭す。雲よ、雲よ、雲よ、暫し其姿をとゞめよや。

○戀ひしき蟲よ

虫の鳴く聲さまぐ\なり、人の聽き取り方もさまぐ\なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

何れか眞の心なる、定かにてはあらねど、各々思ふ所ありげなる、疑ふべくもあらず。雅人の之に聞きて歌よむも、女の之を聞きて怨ずるも、兒童のひそかに窺がひよりて抓み捕ふるも、彼にとりては等しく天變なるべし。暗き叢の下を世界とし、當途もなく叫ぶ、露をもて僅かに喉をうるほし、聲の枯るゝまで泣く。年壽幾日ぞ、伴侶幾何ぞ。親を知れりや、子を知れりや。其の聲の相違ふものに對して如何んの交はりありや。日と夜と、荊棘の床と、花の蓐と相違ありや。曉を好むや、夕べを好むや。世を厭ふ乎、人になつく乎。吾と友たる縁しは結ばるまじき乎。吾思ひは如何にして之に示すべき乎。茫然として獨り靜かに聽く、語らば鳴き止むべし、近よらば姿をかくすべし。嗚呼こひしき吾蟲よ。

○月よ、月よ

月沈々として徐ろに渡りゆく、音なし、聲なし。天文を言ふもの、樣々に解釋すれど、われつく〳〵と其の面をながめつゝあれば、是も亦、有情の物なり。靜婉として吾に對し、うらゝかなる顏はせもて吾に向ふ。言はず語らざるも、其の情に動かざらんや。たとへば、高貴なる方ざまの我を見つめて默し、つゝしみ深き乙女の我に對して言葉なき狀に似たり。過ゆきし人は彼處に住ひて遙かに我を念じつゝあるに非らずや。かつて、夢みて面を合せ乍ら、只だ無言のまゝに落淚せし故人は彼處にあるにあらずや。月は、雲に入りて後、一入光りかゞやき我を誘ふ、銀河雲川を渡るころ一入いそぎつゝ我を顧みる。其光は我に映じ、光の面ざしは我に對す。月よ、月よ、夜と同もに姿をかくす莫れ。

○月の恥かしさよ

月の良き夜半は、何處のはてにありても同もに眺めよ、高殿あらば欄によりてながめよ、底あらば木の下よりながめよ、水あらば水にそひてながめよ、我何處の異鄉にありとも亦同もにながめんなど言ひかはせし友もありけり。今宵、月に對して月を戀ひ、月の言はんとして吾に言ひつくさぬ情けに動きてより、何處の地にか彼人の同もに眺めつゝあるを恥ぢらふ。友情に多少の嫉妬存ず、愛や第三者の入來を好まざるともありけり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○秋のねがひ

萩も枯るるに近し、細花色あせて、葉色緑のうつろひを失す朝貌も日に〳〵數少くなれり、朝たの榮え宛がら夕の別れに似たり。百草、姿細くなれり、萬木、影うすくなれり。我心さびしく、我思ひうれたく、切りに友を囘顧する秋となれり、秋よ、汝は、物の根に復歸せしめんよを欲するや。

○活動の畵

一平にうつしたるも畵なり、遠近を見せたるも畵なり、畵のうちにて活動する寫眞も亦畵なり。左らば、街上に立つて肩摩轂擊の忙はしきを見るも、一たび觀ずる時は、是も亦畵なり。

○紅顏の美少年

盛春の乙女、衣を裝ふて顧みる、渾身、薫ずるものあり、生香步々に散ず。此子、數年にして母となり、兒を抱いて經濟を談ず。途上、新たに見る盛春の乙女を、又亦裝ほひを凝らして花香を薫ず、孔雀恥ぢて飛ばず鶯愁ねたみて沈む。豈斗らんや、此子某家の主婦となり、數年にして老ゆ、亦當年の顏色なし。歲々佳人老いて、年々花新たなり、花を愛せんか、美人を思はんか、郎を慕はんか、詩を吟ぜんか、

○鳥部山の煙、あだし野の露

絕はつる物とは見つゝさゝがにの糸をたのめる心ぼそさよ。左れど、此の糸をすら賴まずば、更に幾層の心ぼそさぞ。絕はつるとは思ひ乍ら、絕えざる間は絕えぬとも思ひ、また絕えせぬよしもあらんかと思ひ、此糸、千丈の綱の如く、此の綱萬丈の鎖の如く、つなぎとめ、まとひ込め、結びつけ、より合せてぞ、久しからしめんと念ず。而して、朝露は貫きがたく、山煙は結びがたく、鳥部山、あだし野の末を如何ともすべきにあらねど、暫らく愛着の霧を固うせんとするぞ、迷ひの中の誠なりける。

大方のわが身ひとつのうきからになべての世をも恨つる哉
我ためにつらき人をはおきながら何の罪なき世をや恨まん

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學

女學生の不女才

◎高等女學校ほどの程度に學ぶ女學生が、在學四五年もするうちに、兎角、前よりはボンヤリする傾向のあるものである。ボンヤリとは、小さな事に早く氣轉の利かぬ樣になるとて、咳をすれば灰吹、腰をさぐれば煙草盆と、昔し言つた風に、直ちに氣取つて迅速に周旋し、萬事を落さぬ樣、外さぬ樣、そらさぬ樣と、氣をつけてゆく才氣が反つて減ずるので、之は父兄などの心配する所、又世の批評家などの苦情を言ふ所ろである。

◎之に對する女子教育者の側の應答如何んと見るに、勉めて其の弊を救はんとして日も亦た足らざるの連中が多くある。而して多少の効を奏するには違ひないが、夫てすら此の女學生を女學校に入學せしめず家庭もしくは他人の中に置て、日々細かな事に世話させて置たのに比較せば、氣轉の利くよは迚も之に及ばないのである。左すれば、女學校の教育なるものは、總べて此邊の才氣を開くに兎角遲鈍であると言はねばならぬが、抑そも之は憂ふべきとか、而して必らず補ねばならぬと乎、先づ以て其の先決問題に質實なる研究を要するとである。

◎假りに、男子の場合に比較して考へて見るに、町家の二男三男などが、終日店頭に居て客の御用をきゝ、百事を鄭寧に迅速に扱かつて居る頃などは、感心するほど目鼻の利いたものである。然るに、之が商業學校の類に入學して二三年も立つと、平素の仕こなしが頓と昔しと違ふのみならず、偶に家に歸つて店先に出て居る時すら、迚も昔日の調子は無いものである。スルト、父兄も多少は澁面を仕て居る、教師も之を聞いて幾らか心配し、さま〳〵に其邊の工風を爲るとてあらふが、左りとて、決して元の如くにはならぬものである。中には、之を書生風、學校風の生意氣と稱して攻撃するものもある。成程、多少生意氣には相違ない。然し、此の生意氣も、此のボンヤリも、凡て學校教育を受るものには是非、つきものである。夫を全たく取除くとは出來ぬかの樣である。此時

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に當つて、敎育者たるものが、單に父兄の目前の注文に驚ろき、もしくは世人の卑近なる評判に恐れて、たゞ〳〵其の苦情を減ぜんと計りに工風するは、適當であらふ乎。

◎但し、此處に誤解を避けたきは、吾輩が今ま言つて居るヿは、學校在學中、もしくは其卒業間際の場合を言ふのである。卒業して社會に出で、いよ〳〵實地の事に着手したと云ふ後に至つても、尙々いつ迄もボンヤリ然として實際家に劣ると云ふやうなヿを辨ぜんとして居るのでは無い。單に在學中、又は卒業後の暫時の間の事を言ふのである。此の間だに於て書生が、少しウスノロの氣味になり、男で申さば、ボッチャン風に、女で申さば、男らしくなると云ふヿは、抑そも果して根治すべきヿであるか、又は棄置くべきヿである乎。篤と敎育者の思慮を要すべき問題であると考へる。

◎婦人で申すと、其の些細な、濃やかな所ろに氣の注くヿを特色とするので、取分け、我國に於ては、余程此の一點が發達して居る。又、男子先生は多年其の恩澤にあづかり、女と云へば是非左樣にしてくれるものであるとキメて居る。着物は一々着せてもらふ、足袋迄はかせてもらふものがある、ソレ紙入、ソレ煙草入、ちり紙はをもちか、扇子はお忘れなさらぬ乎、お手拭はいかゞ、と一々介抱して貰つて夫で得意でもあり、又滿足らしくもある。もし西洋人などから見せたらば、此男子は、白痴であるのか、又は、片環であるのかと奇しむであらふが、之が即はち東洋風で、中にも日本は、此の御用きゝを一々女にさせると云ふヿになり來つて居るのである。夫故、其邊の世話介添になれて、男子を病人扱にする看護的の介抱を特の外の女才としてあつたのである。

◎夫故、此の女才が減ずるを見て、男子が不平を言ふのは、尤ともの事に聞える。然し、一應考慮を煩はしたきは、凡そ頭腦の啓發を主として、算數、理科、歷史、語學などに勉强せしめつゝある時に、「ソレ灰吹、ソレ煙草盆」的の氣轉を利かさするヿを同時に勵行するは、敎育上の經濟である乎。

◎否な、女には左樣の頭腦的啓發は入らぬ、女は何處迄も、看護婦的、世話女房的で宜しいと言はれる方もあらふ。之は亦た別段に大議論せねばならぬヿであるが、然しソノ樣なる目的の人ならば、何も女學校に入學せしめずして宜しいのである。女學校なるものの敎育は決して左樣の目的で無いから

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

して、女につきて斯る理想をもてる人は、もつ人の自由として、さて其樣なる人は女學校にやらぬが宜しいのである。然し、一つ丈け其人に申して置く、成程、女なるものを左樣なる世話女房に作り上たらば、良人たる其人の平素の仕ひこなしには便利であらふ、又、家庭なるもの、無事の時の平和は其邊に存するであらふ。但しコンナ女からして英雄豪人は產まれぬ、產れても育てることは出來ぬ、と云ふ一事丈を注意して置く。妻を娶るの目的を、家庭の快樂丈に考へるのは、利己千萬の事である　立派な子孫を育成するに不利なる女子教育は、斷じて邦家の承知せぬ所であらふ。

◎左すれば、女學校在學中、又は卒業早々に於ける女生其人のボンヤリは、大して心配するに及はぬ。然し、いよく實地に當つても尙ほ才覺がきかず、牛刀を用ゆるだけて、小刀が使へず、良人大事の塲合には役に立ても、平生少しも氣がつかぬ樣では、之は篤と教育者の思慮を要するのである　而して、其の補ひ方、其の實地教育方に付て、一應の工風を要するとてある。然し、今の如く女學校在學中の學生をして、茶屋の女一流に競爭せしめる程に目前の周旋に許り心配し、爲に其の腦力啓發の一大事を忽諸にするは、教育者たるものの信切にてはあるまじと考へられる

昆蟲學と家庭

名和靖君談

◎岐阜の小學校の子供等がソルサ計りして困るから、或る時勸めて虫を採らせました。スルト、面白がつて中々餘計採るやうになり、自づとワルサが止みましたが、反つて困ることは、お母さん達が不平を言ひはじめました。名和と云ふ人は何んと云ふひどい人だ、子供まですゝめて殺生をさせる、恐ろしい鬼の樣な人だと言ひます、夫で、子供が折角採集して內に持て歸り、箱などに入れて樂しんで居ると、ソツト來てゝ仕舞ふ。子供は自然、私の家に持つて來て置くやうになると、今度は母親たちが怒つて、私の所に成る丈けよこさぬやうにしました。夫て、私はソンナに恐れるのではないが、試みにどうするかと思つて、或る時、子供等に談しました。君等の所のお母さんが大へん機嫌が惡るいそうだから、少しの間だ來玉ふなと言つて歸しました。夫で當分來ないやうに

なつたと思つたら、又々ワルサを初めました。

◎昆虫學の採集に對して、殺生戒を以て反對せられるのには困りました。夫で、私はミンナに能く言ふのです。殺生戒と云ふものは、ソウ云ふものでは無い。悪るい虫などには殺しても構はぬものだ。然し、之を殺すのに、決して慘酷にしては成らぬ、矢張り慈悲をかけてやれ。人間でも、一と思ひにして絞罪にして殺すのであるが、虫といへども、手をもいだり、足をもいだりして、なぶり殺しにしては成らぬ、手の平か、足の裏で、一氣に殺して仕舞へと言つて教へました。ソレデ岐阜の高等女學校で話しました時には、佛教の信者が多い所ですから、ソウ言ひました。アナタ方は、虫にも情けをかけて、殺すときには、南無阿彌陀ブッツと、押へてやれと申しましたら、後でミンナが言つたソウデス、名和と云ふ人は鬼のようなものかと思つたら、なか〳〵有がたいことを言はつしやると。

◎女の方は、小さな虫を見て、固よりコワクも、何とも無いものでも、「ヲー、コワ」と言つてあとしざりする風にして、夫で優美だと思つて居られる方が多い。夫では、實に子供の

為にもなりますまい。恐るべきには恐れ、恐れなくて宜しいものには少しも恐れぬのが、眞の勇氣です。小さい時から、些細の虫などにこはがらせ、大きくなつても、何々と云ふ虫を見ると、顔の色が青くなるなどと云ふやうにさせるのは、全く母親の昆虫學を構はなかつた結果です。

◎然し、現在所々の講習會にいつて、男女双方の人々に講習をして見ると、サスガ昆虫學に熱心になつて、本氣に採集などをせらるる人は、兎角、女の方である。男の方は、遊び半分などで出かけ、虫を取つても、「コリヤ先生何と言ひます」などと、杖のサキに毛虫を引かけてゾンザイに聞かれますが、女の方は、絹のハンケチなども構はず、之に包んで大事にして來て見せられます。萬事が自然とソウ云ふ風にちがひますから、私はソウ思ひます、一と通りお話しさへすれば、女の方は至つて昆蟲學の友となる人であると。

契けん程や過ぬる秋の野に人待蟲の聲の絶せぬ　讀人不知

覺束な何處なる蟲の音を尋ば草の露や亂れん　爲頼

秋の夜の哀は誰も知ものを我のみと泣く蛬かな　兼宗

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

料理道

○家庭料理法に就て（一）

生間正起

公私立を問はず、目下女學校に於て教授せらるゝ處の料理法は、家庭料理の程度外に背馳し居らざる乎。背馳せるを知りつゝ放任せらるゝ乎。或は受持教師に一任して、程度の外に背馳せるを知らざる乎。今日の受持教師の多くは、生徒の歡心を買ふに只是れ汲々として、程度の如何を辨知するもの、殆んど之なしと雖ども、當局者尙ほ之を以て足れりとなす乎。曾て余が當路者より聞く處に由れば、學校にて教授する處の料理法は、極めて簡易なるものにて、只日常の副食物を容易に裁斷烹炙し得らるゝの道を教ふれば足れり、蓋し一尾の魚類を得るあるも、之を調理することを知らざれば、不便なるゆゑ自ら水洗をなして、之を作るとか、烹るとか、炙るとかと出來る位の事を教授し置けば、至極便利て、且つ家事經濟の點に於ても得る所尠からず、唯喰ふ事のみを知て下女に小言をいふも、自ら手を下して豆腐一ツ滿足に煮る事が出來んては不都合なるゆゑ、學校で料理を教授する樣にした譯てあると言はれしに、其實況を窺へば、學校にて教ふる所の料理は、料理屋的の料理法にして、余が聞く處とは頗る高尙なり。或時、一學生の告ぐる處を聞くに、折角學校で習ふても家で施行し得らるゝことが少ないゆゑ、大に困りますといふたが、夫は其筈である。如何となれば、腦裡に家庭といふ事を置ざる料理屋の板場や、料理人の先生達が、教師となつて、教授せらるゝゆゑに、自然料理屋風に流れて、高尙過ぎるゆゑである、其の高尙なる料理は、今日の家庭には不必要である、日本料理の少し高尙なるものですら、猶且つ然り、況んや西洋料理や、支那料理の不必要なることは、論を俟たず。然るに、此の種の料理法を教授する學校ありと聞きしが、これ世の風潮に投じて、生徒を吸集せんが爲めの策に出でたるものならば、余は一言を費すの價値なきを以て、敢て問はず。只單に教へて置てもよいといふ位の考へから教へるのなれば、裁縫も法衣から洋服支那服迄教へるがよし。それとも料理法丈は、是非高尙に廣く教へ度きとの考へなれば、女子割烹學校を設立して、各國の料理法を料理屋的に薫陶するがよい、家庭の程度に適合せぬ料理法を、家庭科に於て教授するとは、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

實に不都合千萬ならずや。當局者知て之を問はざる乎、之を問ふに遑あらざる乎、監督其人を得ざるが爲め乎。

○冷素麵

素麵を沸湯中へ少しづゝ散亂し入れて攪拌し淪きて冷水へ移し水中にて能く按洗し數回水を換へて冷却せしめ之を器に盛り鹹味強く調味したる濃厚なる鰹の煮汁に辛味を添ふべし。辛味とは蘿蔔の絞汁又は卸蘿蔔、山葵、蕃椒、芥子の類を云ふ。

○牛尾魚葛叩き

先づ水洗をなし三枚に剮し薄身を鋤き取り身に葛粉を散布し庖刀のむねにてそろ〳〵叩き何回も葛粉を散布し身に葛粉の能く通る程に叩き込み蒸して隱し葛の溜油を溜て用ふべし

隱し葛とは葛が引きあるか否判らざる程隱微に引きたる汁をいふなり

葛叩きを吉野叩きと世にいふものあり其の所以は吉野は葛の產地なるより葛叩きを吉野叩きと唱へしものならんが是の筆法よりして言へば熊川も葛の產地なるゆゑ熊川叩きと唱ふるも可ならん歟いにしへより字音の惡しきものは名を變じて用ゆる事あるも（例へば豆腐の滓を卯の花又は雪花菜、梨をありの實と呼ぶが如し）葛の字音たるや惡しからざるに何んぞ上品振つて斯の如き名を下したるや余等が如き謭劣なるものには櫻の花でも叩き込みたるものならんかと疑ふ唯これのみならず近來斯の如きたぐひ日に月に多きを加ふ是他なし世人を瞞着して肴を賣らんが爲めに勝手氣儘な名を付くるを以てなり故に名美にして實美ならざるあり又名を聞き試みに食ふと雖ども名の由て來る所以を解し得ざるものあり右等は一笑に付し去らば去るものゝ奸商の罪實に惡むべし

偖て右の牛尾魚は一に鯒といふ俗に魬の字を用ふ其形たるや頭大にして身橫に扁く口濶く下唇出て、尾は細し細鱗にして背部は灰色腹部は黃白也頭及鰭の端に刺骨あり大なるものは尺餘に及ぶ是の魚海中にあつて如何なる生活をなすや如何なる所に住むや之を考ふるに實に魚中の紳士ともいふべき歟食を求むるに齷齪せず悠然身を沙中に潛めて小魚の來るを待て食ふ其の狀恰も世の紳士が美人屏裡の酒肉の間に盤座して貧民の膏血に飽くに何ぞ能く相似たるや牛尾魚より他の魚類が食餌を求むるに奔走するを見れば凡そ人間社會に於ける天麩羅紳士ならずんば下等の勞働者たるの觀を爲すあらん歟

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

光瀾之觀

記錄

奥遂

人と貴神とは、是れ親子の倫也。而して民は皆な同胞。其の神を奉ずるが爲めにして集合する者、之を同人と謂ふ。其の要道は、各自其の務むる所に於て能く各他に悌從するに在り、即ち各々他人を以て兄と爲す也。厥の目的は、專ら其天職を務めて以て天地の盛業を大成するに在り。

「學者が師を求めざると、求めても虚心なる能はざると、又た退聽する能はざるとは、此れ固より學者の罪なり、學者が師を求むるを知り、又能く退て聽くも、師の之を導く所以の者其道に非ろは、此れは即ち師の罪たり。」

「當今の世誰れか實に有志の士たるや、眞實學者を斯世に求むる亦誠に難い哉、道の知り難きには非る也、人の得難きにも非る也、其勢ひ則ち難し、然とも有志の士其れ肯て自ら此に恕して而して其志を求めざらんや。」

新井君歸朝後同村に住ひ朝夕相見るも曾て精しく其の在米の景況を聞たるとあらず。他の喧傳する所を風聞して時に一笑するのみ。左に記載する某氏の文の如き、固よりかゝる風聞錄の一に過ぎず、新井君に見して認定を經べき必要もなく又讀者に之を眞とせよとも言ふに及ばず。但だ今回新井君の文短かしときくにより、戯むれに之を挾はさめと言ひ置くのみ。善治。

泉叢團體の側面觀

○新井奥遂氏は、明治三年、長澤鼎氏と同もに森有禮氏に連れられて米國桑港にゆき、ハリス翁に師事して教を研究すると三十余年、二三年前に初めて歸朝せられた人である。

○氏は仙臺藩士て、維新後藩を脱し、劍を提げて諸所に放浪し、或る時、函館に隱くれて居る時に、東京の友人から急に呼によこした。來て見ると、其人が森有禮氏の所に連て行つた相て、いろ〱話しをすると、森が新井氏に向つて、近頃

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は何を爲て居られるかと問ふた。「近頃、新約聖書と云ふものを見付けて讀んで居ますが、アレは本物でなか〳〵、面白ふ御座ると」言ふと、森が「誰か先生があるのですか」と問ふた。「イヤ、別に先生は無いのです」と言ふと。「夫れては善い先生があります、私等の師匠ですが、ハリスと云つて、英吉利の人で、近頃、アメリカに來て居られる、然し此人が弟子にせられるかどふか、夫は分らないが、兎に角、行て御覧なさい、先日も、アル英吉利の貴族が、其の身代をスッカリ寄附するから弟子にしてくれと言ひましたら、寄附するヿと、弟子になるヿとは別の事だ、寄附がしたいならばなさい、然し弟子にするヿは出來ぬと言つたヿもありますが、ソッカと云つて、私等の如き一介の書生をも大層可愛がつて弟子にしてくれました、私も鮫島（後の全權公使）もそうです、ダカラ君が行つてもどふであるかは分らぬが、兎に角、ゆき玉へ、もし弟子にせぬやうのヿであれば、私は四年ほど、ワシントン府に滯在する筈であるから、飯丈はくわせる」と言ふヿて夫から薩摩の長澤鼎と同もに連れられて行れるヿになつたのだソウダ。

◎あちらに行つてから、二人とも直ちに弟子にせられ、爾來三十年、二人とも、ハリス翁より「吾子」と呼ばれて愛育せられ、中にも長澤氏は有名なる葡萄園を管理し、新井氏は、ハリス翁の著書の手傳より、秘書の如きヿをして居られたが新井氏丈け二三年前に歸朝せられたのである。

◎近頃ろ、其愛孃に三つの學位を負はせて歸られたる柳澤佐吉と云ふ人は、明治の初めの頃より、フハウンテン、グローブと云ふ、所以ゆる其の葡萄園があり、又ハリス翁が住んで居られた所に働らかれた方であるが、其人が無邪氣に評判せらるヽ所は、暗に此一團体の側面觀である。固より其の實相眞相の精密を話してはないが、物は反つて通俗な側面觀が面白いものである。

◎柳澤氏曰く、長澤氏は、葡萄園に働らいて居る日本人の仲間で、「今太閤」と言ひます。實に精力の强い、何をしても一番エライ伎倆家です。一日働らいて、夫で夜は寢る前に必らず一冊づヽ小説を讀んで仕舞ふ、馬に乗るヿが非常に上手で誰と會つても必らず競爭して勝つ、もし相手の馬が勝つと、必らず其馬を買受けて種をとつて仕舞ふと云ふ流義です。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

計畫が遠大で、年月と同もに次第に成就させるです。前方、一寸と日本に歸られたは、日本政府に申し込んだので、七十萬人の日本人をメキシコに移住させる、其の三年間の食料と農具とを日本政府で貸してくれゝば、十年成就の曉には、政府に收入の三分一を永久納めると云ふヿで、余程考がへたものであつたが、行はれませなんだ。現在、葡萄酒では、世界中で、コヽが一番よいので、佛蘭西が善いなどゝ云ふのは夫は前のヿです、たゞ古いものがあるから言ふ丈で、今の產出の中では、此のフハウンテン、グロープが一番善いので、商賣人仲間での公論です。世界到る所に賣捌所があります、日本にもあります。ソウシテ其のもふけと云ふものは、大したもので、ミナ夫を以て此の仲間の入用にして居るのです。ハリス先生の門下は、二十世紀から初めて傳道をすると云ふので、ソウして、先生は今ま八十を超した方であるが、決して死なぬ方であると誰も信じて居ます。團躰の內でも、ソウ自由には會ふヿが出來ませぬ、私は三年間にたつた二度、フイとあひました、それも合はふとしてはあへぬのですから、多く働らいて居る日本人でも、少しも合つたとも、見たともない人が多いです、人を見ると、先生の方が避けてゆかれることなどが常です。そして、先生の食物から、御用から、ミナ預言者に對するの禮を以て承はるので、悉とく白い禮服をつけて給仕をします。新井サンは先生の書かれたものを印刷せられる役て、又、先生が何處かへ行れたり、山に入られる時など、始終一處にゆかれました。先生は朝の內に每日何かお話しをせられると、夫をワキデ筆記するものがあつて、其の筆記は余程澤山あります。私も三册ほど所持して居ります。其から、團躰の財產はミナ共同で、誰のものでも有ません。日本人が初め働きに參つても、丸で放りぱなして、少しも差圖と云ふものはありません、先の人のするヿを見てするので、差圖などされて爲るものは、つまらぬヿと爲つて居ます。其うち仲間になるので、夫で出ると云ふ時には、相應に分前を貰つて出ます。此の仲間ではミナ酒はのみますが、一度にコップ一杯で、一週に一ガロン丈はミナ貰ひます、其より上は貰ひません、夫で醉つて居る人を見たことがありません。中には、ソット外へ行つて買つて來て飲むものもありますが、夫は後て叱られて止ます。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

舍監の四ヶ月（其二）

青柳有美

○舍監を…………四ヶ月もやれば矢張り色々とがありますよ。…………兎角長く田舍廻りをして居ると、天狗に成り易いものですから…………マアそんなに笑はずに聽いてくださいナ。餘り手柄話をし樣とするものだから『有美もソロ〳〵ヤキが廻ッて來たナ』なんテ…………冷かしたいのでせう　それは御勝手として…………

○僕は…………これまでの舍監の樣に消燈喇叭が鳴ると、直ぐ舍内の巡視をするといふ風にはせんて、大抵…………マア十二時半か十一時半頃に廻はることにして居ました。これは、僕が最も火の用心といふことに、全心の注意を傾けてたからなので。然し、又每週三四度位は、消燈時刻の九時頃に巡ッて觀もしたのです。

○或る晩のこと…………これは僕が舍監を辭めさしてもらへる樣になッた一ヶ月ばかり前なんですが…………消燈喇叭が鳴るや否や巡視に出かけました。すると…………奴さんたち…………今夜あたりは、今時僕が廻ッて來る氣遣はあるまいと思ッてたものか…………梯子の直ぐ下の室でヱッイ騷ぎをして居る。一向、僕が梯子を降りて來たのにも氣附かぬ樣子でした。

○それも其筈なので、その室員七人ばかりのうちの二人は、飽まで、酒を被ッて來て、殆んど溶けるが如くに泥醉し、一人は聲高く吟聲を肆にしながら劍舞に耽り、一人は眉のあたりに黑々と太く墨を入れて、今やサカリ壯士芝居を眞似てる最中なんでしたから。…………が、僕のガラリと戶を開けて室に這入のを觀るや否や…………これはしたりといふ調子で、直ぐフッとラムプを吹き消し、一同布團を被ッて床の中にもぐり込んでしまいました。

○これは…………困ッたものだ、アキれたものだとは思ッたが…………僕も又少し考へることがあッたから、格別ヒドク叱りつけることもせず、たゞ『あまり馬鹿なことは爲るものでないよ』と、輕く捨臺詞を殘した丈で…………そのまゝ他の室々の巡視を續けたのです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

〇ところで……一旦舍監室に歸り、十分ばかし休息してから、今度はヌケ足サシ足で、少しも音のせぬ樣にコソ〳〵と廊下を傳ふて、前の馬鹿に騷がしかッた室の處まで出かけ、戸の影に身を忍ばせながら、何食はぬ顏で中の樣子を窺ッて居ると………。これは〳〵實に大變………！再びラムプに點火をはじめ『オイ〳〵煙草が無いか煙草が無いか………』などゝ、又コソ〳〵騷ぎだして來ました。

〇隨分………僕も………戸の影に身を寄せて室の模樣を立ち聽きするなんて………甚だ卑劣に見えませうが子………それは又止むを得ないので………。却說、その飮んだくれて劍舞をやりながら騷いでたといふ書生は仲々のエラ物で、充分餓鬼大將やストライキの隊長になる資格のある男でしてネ………噂に依ると、少さい書生どもなぞを旨く操縱して、多少の金を捲きあげてさへ居るといふことなのサ。僕は豫ね〳〵………然し此書生は餘程有望な男だと見込をつけて、ドウか良くしてやりたいものだとは、心窃に念じては居たもの〻、唯他の書生たちに惡影響を及ぼしはせぬかとそればかり心配してたので………

〇こゝが………舍監といふ役目の極ツライ又苦しいところなのですよ………おわかりですか。腹の底では………コイツ此れ程大膽不敵なことが出來るか………仲々面白いヤツ感心だワイ………と思ひましても子………そこはツエイことに、舍監といふ職を帶びて、二百人にも餘る大屋臺を控へてとみれば、ソウ〳〵勝手に放任ッておく譯にも行かず………それでは丸で秩序が無くなッて始末がつかん樣になりますからナ………心にありもせぬことをいふて、叱りもし責めもしなければなりませんのサ。實際淚ですよ。

〇この書生といふのも………仲々精神に威力と壓力とを備へてますから、これを善用させさへすれば、人の頭になッて大事を爲せる男なのです、何時でも敎師や舍監やの前では虫も殺さぬ樣な顏をして、實に從順無類な態を粧ひ、騷がしいことなぞはオクビにも、爲て見せぬ………容易に食へ無いヤツでしてネ………しかし、僕の恐れてたのは、コイツ或は男色をしたり、或は他の生徒を穩密に煽動てこんで、何か事件でも持ちあげはせんかといふことでした。………て………この男の顏を見る毎に『あなた、惡るい事をしてはイケない

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ぜ!』ど、口癖の様にいふてましたが………騒いではイカンの、アバレてはイカンのと、一度もいふたことは無いのです。

○僕が身を戸影に忍ばせたといふのも…………或は………といふ心配があッたからなので………。ところが又………果せる哉………で子。暫くは、マッチを擂ッて煙草を吸ふたり何かしてる様子だッたが、そのうちにラムプを消すと、室員の一人は、その男に何か前夜の語り殘りの昔話を語り續けてくれと頼んだらしい。そのうちに、其話も濟む………とすると、その男は突然と横に臥て居る一人の書生に問ひかけたのです。

○『タレソレ君………君は一體明日教場に出る氣か』『ウム………出る積で居る』とは、其答であッたが『それアー君止めた方がいゝ!』と命じたしたので………これは困ッたナと思ふてると、その命じられた書生は『ウム………そんなら僕は出ない!』と快諾を與へるのです。すると、又他の舍員に矢張り同じ調子で『タレソレ君………君は明日ヤッパリ教場に出る積りか』と問ふ。『ウム………出る氣だ』と答へると、『それアーやめた方がよい』とコンマンデヰングの調子で又命ずる『ウム………そんなら出ない!』と答へる。カラ…………!他の室員といふのは、實に意地氣が無く、丸で猫が獅子の前にでも出て、イガまれた様なものでして子………つまり其室員一同七人ばかりのものは、翌日の學課を休むことに一致させられてしまいました。

○すると、其男は更に又說き出したので………『青柳先生はドウも僕のところを餘程惡るいことを爲るものと眼をつけてる………。明日はコウ皆な學校を休んで、下宿屋を探すに廻り、宿が見つかッたら、僕が室長代理として退舍願を舍監室に持ッて行き、我々は行が惡るくッて、寄宿舍内にあッては他の生徒の妨害になるから、ドウぞ外宿を許してください」といふから、ソウしやうぢやないか』といひ出した。これにも、室員一同贊成の意を表したのですよ。仲々エライものではありませんか。

○これを聽きながら、サテあきれたものだ………ドウかこの決議を翻させねばならぬと、僕も………一時は思案にアグんだのでしたが子………それは物極まれば必ず通ずで子………

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

名案が浮んで來ましたよ、僕だからとて、これでも海舟先生の陪臣位ゐにはなッてますから子……なんでも、こういふ時には機先を制しさへすれば、つまり勝になるんだと思ひましたサ。

○奴さん……酒を充分飲んでるから、必ず夜中小便に起るに違ひない。その起るまで室の戸口に坐り込んでゝ、その起きて戸を開けに來るところを前に塞がッてて『オイ！ナニナニ君一寸！』と、突然虚を衝て説諭を加へたら、必ずメンを食らッて飜然企を棄てるに相違あるまい、……明日充分腹を拵へて、構へ込んで舍監室に來てから、何を説諭したからとて、到底耳に這入るものではあるまい……アゝこれが上策だと、其儘戸口の廊下に坐り込みました。

○夜は段々深けて十二時にもなる……が、まだ起きて來ぬ。丁度三月頃、しかも寒國でしたから、僕も仲々寒いので子…………廊下に懸けてある生徒の外套などを取りて身に纏ひ、寒サを防ぎなどし、今起きるか〳〵と待ッてましたが、仲々起きて來ぬ……そのうちには、色々その男の將來のことなぞ考へて子……この惡魔主義の僕には實に珍らしくも……

願くは、神この望ある青年の前途を導き、その技量を善用させ給へと心から祈りもしましたよ。早や、舍監室の柱時計はボーン〳〵と二時を打ちますが、一向に起きぬ……到底この分では夜中に便所へ立つ摸様が無いやうに思はれたのです。

○止むを得ん……ラムプを舍監室から持つて來て、その室内に入り、その男んとこを聲をかけながらユスブリました。すると、眼をコスリ〳〵床の上に起きあがりましたが、見ると僕なものですから、定めて意外なのに驚天しましたらう。その着衣を更えて正坐するのを待ち、これまで僕が其男に就て考へてたことを淳々と一々説き聽かせ、今夜の相談の甚だ以て不心得なることを談り、よろしく室員一同に之を取消す旨を傳へきかすべきを諭し、且つ天賦の器量……殊に特得の統一力を宜しく善用すべきを勸告し、若し不注意にも之を逆用する如きなどあらば、天下有害の大惡人たるに至るべきことをも、呑み込ませました。

○素より、僕に機先を制せられて、用意の無い虚を襲はれたのですから、抗論などする餘裕が無く、心から又僕の言を享

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

けてくれた樣でしたよ。翌日その室内一同は皆な例の如く學課に出席し、別に退舍願をも出しませんでしたサ。

まだあります

花子のなげき

故中島湘煙女史遺稿

（其三）

花子同胞の口よりは叔母と呼ぶべき家世間にては百萬圓以上と注せらるゝ資産家なり舊家とはいへ落日風寒き父母の許に養はるゝよりも朝日輝く叔父の家に引きとられしは幾倍の幸か知れぬと世に羨まるゝつらき花子が母とこの家の叔母とは表面こそ親類の交は結べ内部は月に日に累なりて解けぬ惡感情のありしとは知らぬ世間花子に同情を表せぬも無理ならず叔父の家は實に朝日の登る勢と他人の評するもうそならず某政黨の運動費も一手に引受け某新聞が他を壓倒して天下にもてはやさるゝも惜しますつぎこむ資金の力實に大したものと賞せらるゝ聲は花子の耳に入ては火事の急鐘を聞くに異ならずして胸に熱波を躍らし惜しげなく擲てるも何の不思議かある元々拵ひし金なればとつぶやく事もありぬべし叔父なる人はこの名望を踏臺とし里に鳥なきを幸にやすく／＼と帝國議場に肩聳やかし政府反對の剛の者と數へらるゝ一人とならんとはおのれながらにも十年の昔しには夢にも想はざりし事ながら物のはづみははからぬ結果を顯はすものにこそ

この叔父とても芋掘りの親方にてすむべきが順路なるをつまつてもつまらんでも天下の代議士三百人と定まりたる中の政治家となりし其原因を溫ぬれば世は學問時代となりて聊か資産ある父兄等は少なからぬ學資に小首は幾度となく傾くれど前途の出世をあてこみに其子弟を都に出して學ばしむる父兄の苦衷は察しもやらぬ年少の子弟初の程に勉勵する輩らも多くあれど眞摯なる田舍堅氣漸次に輕薄なる都會の風に化せられなくもがなの小智慧に自らかぶれ嚴重なる學校の課程を踏外しては再び復修せん元氣も出すさりとて郷を出るの際知己朋友送別の宴に於て學成らずんば死すとも歸らずと大呼した一疋の男子今やこのまゝおめ／＼と歸りもならず腦病にて學問は健康に害ありと大醫の診斷なりといはゞいふて歸れぬ事もなけれど腦病には運動が第一の治療法祖先より學問の遺傳

もなきに世の流潮を趁ふて都に出したればとて病に罹るなりもう家に歸り鋤鍬持つが肝要なりとやらるゝは必定このおもしろき花の都知ぬ前ならば夫迄の事知て見ればどうして〳〵土臭き田舍に歸らん如きは夢にも望まず如何はせんと考ふる折同氣相求むるものも少なからずナニ君心配し給ふべからず今日は君如何なる時と思ひ給ふ區々たる古人の糟粕のみを嘗むるの狀に非ず志士須らく國家に竭くすべきの日だぜこの廣き天下爲すべき事は大ありだ僕等も聊か考ふる所ありてね近日退校して地方巡遊と出掛るんだ君若意あらば同遊を試み給へ成程卓說妙論至極同意だ抔と此の如き連中一人より二人と日一日と增加し到る處大言壯語以て時の政府を罵倒したれば久しく專制以下に棲息し居りし人民の耳には尤も新らしくふるくさき軍談を聞くより、遙か愉快なれば每夜のやうに開かるゝ演說塲いつも立錐の地なく顏を顰かめて嘲るもあり手を拍て譽めるもありドウダイ吾が黨のリーダは敵の毒矢を拔かんともせず板垣死すとも自由は死にませぬの一言豪傑だねこの一幕團十郎にでもやらして見たいね抔評するもあり分らぬなりに番頭小僧迄政治を談ぜんとするに至りたるも亦時なる

哉されど世は樣々にて妻子を忘れ身を忘れ熱淚を灑ぐ民權を唱ふるものもかの自由を鼻歌に謠ふて下宿屋の料にするものと謂はゆる玉石混淆一山百文の中に抛げこまれ無智無識過激粗暴の徒と嘲けられしときは獄窓の鬼と化し或は斷頭臺の露と消えし輩らも少なからざりしとか。

花子の叔父も一夜大坂に來り政談演說とはいかなるものかと聽て見しがふら〳〵とひきこまれ遂運動費を出す氣になりしが緣となりて交りを結んで見ると磊々落々實にあどけなき氣風に心もゆるみ且今まで素町人士百姓と自ら卑下し居りしが此仲間にては巡査を視ると蟲けらの如く大臣を視るも昔しの庄屋殿位に過ぎず之に反しておのれ等は有志家と尊稱せらるゝに心醉しておのれも立て諸君といふて見たくなる懇親會に盤戰はして此の如き專制政府はと演て見ると感心してかをかしきてか知らず兎も角も滿堂崩るばかりの拍手に生來未曾有の興味を覺えしが原因となりて田舍政治家とはなりたるなり國會議員とはなりたるなり茲にをかしきは議院閉會後總理大臣の宴遊會に招かれ或議員の紹介にて親しく首相に面會の折御歸國迄に一度御來遊なされといはれし一言が骨身に染みて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

うれしく苟そめにも總理大臣ではないか其總理大臣と膝付合はして物語りの出來るなれ歸國の後いふて聞かしても眞にはうけまいよし〳〵いゝ證據品かと心付再三膝下に拜趨して一葉の揮毫を得たるとなるが逢て見ると大臣といふもの急にありがたくなり今までやたら政府攻撃せしが空おそろしく人を知て見りや攻撃抔の出來たものじやない薩摩だとて矢張人間じや人間中でも尤も好人物だをれが長く口を極めて罵詈せしかも露程根にもたぬ度量にはほと〳〵感心だ次期の議會からはとても政府案に攻撃する事は出來ぬと志士名士の鍍金早くも化の皮をば顯はしたり

由ちやん鳥渡おいて今日は幸ひ叔父さんも叔母さんも留主だから鳥渡お出といふに

ダツテ姉さん今この通り叔父さんの沓磨てるじやないかすんだらすぐゆきますよ

沓位どうでもいゝはね

いひつけられたの皆爲ておかなくちやどんなに叔母さんに叱られるかしれやしないから

その小さいのは誰れの　　　これは坊ちやんの

坊ちやんていはなくとも名をおいひよ

姉さんがいつでもさうゆうもんだから此間名をいつたら叔母さんがどんなに怒つたか

さうかへ怒つたていゝはねそれより早くおしよ私も手傳て上るから

姉さんのやうにさうんなに雜にするとみがき直せといはれるから矢張私がするよ姉さんこゝの叔父さんはほんとにゑらいものだぜこの沓穿てこゝの八幡さんの庭を十も十五もよせた程の處にうつくしい花がいつぱい咲てるんだとそしてね泉水ね其泉水に裏の椎の木あれより高い噴水が出てるんだとよお茶やがいくつもいくつもあつておすしもあればお菓子もあつてお叔父さんが欲しいとおもふもの何でもたべる事が出來てそしてお鳥目は拂はなくつていゝのだと夫から天一とかいふ人が西洋のおもしろい手品をして圓朝といふ人がお話しをしたてよそしてね昔しなら天下さんといふ程の人がねお辭儀しに來たてよこゝの叔父さんによ姉さんなぜだまつてるんだぞの天下さん見たやうの人が叔父さんにお辭儀したてよ

いゝよ分てるよおまへはそれがうれしいのかへ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

姉さんだつてうれしい癖に
由ちやんおまへ最う其歳になれば少しは口惜しいといふ事が分りさうなものじやないか澤山丁穉小僧のあるにおまへが磨かねばならぬ沓かへよく考へてごらん
磨がきたかないんだけれどいひつけら——
サーそれは私も知つてるよおまへが沓みがかうとも水汲うともそれはするのがいゝのだよけれどもこの家からいへばおまへは本家の旦那ではないかそれにこのやうなことはこれでも何ともないのかへ口惜しくはないのかへ學校へでも通はしてくれとなぜおまへはいはないのだ私がいへば何分本人の心まかせとばかりいふからしやうがないじやないか叔父や叔母は一躰どうゆう人と由ちやんおまへおもつてるのだ
私だつていゝ人だとおもつてるは
ほんとにあきれるなこの姉さんや由ちやんの家のお金はどうしてなくなつたとおまへおもつてるの……
父樣が人が善過ぎてかー樣がお里へやつたりしたから
由ちやんおまへ最う一度いつて見な誰にそんな事聞たんだよ
叔母さんに
おまへこの先どうしやうとおもつてるんだ
おとなしく叔父さんや叔母さんのいふ事を聞さへすれば一生置てやるといつかも叔母さんがいつたからおとなしくして置いて貰うんだは姉さんだつてさうだろうよく働たら置てもらえるんだろうよと
聞た花子力も望みも竭き果てていふて聞かさん言葉も出ずよく〳〵吾が家は絶ゆるの兆かどうしてこのやうなる無氣力の弟か出來るものにや栴檀は二葉よりといふ況んや十六といふ齢……嗚呼この弟なくば一日も此家に居る如き妾にはあらず父君母君の靈魂はいづくに在すなぜこの弟を保護しては下さらぬなぜ人並の由二とは爲してはくださらぬ——否こは吾ながらもつたいなき申分許させ給へ地下の父君母君こそ妾を甲斐なきものとおぼし給はん妾でさへも身の甲斐なきを知らぬにはあらず一度は積る怨み叔父叔母にいふていふていひ盡さんとは思へどもいふて怨みを霽らせしとて何等の効もなきのみか忽ち困るは弟の身早成は大器にあらずとも聞く若しやこのぼんやりが他日はあつぱれの人となりて家を興さんとも限られずとすればこゝは忍耐すべきの一大關門父君よ母君

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

よ妾が心の腐りて敵とも見べき叔父叔母に意氣地なくも頭を下げて下女呼はりせらるゝ花子にはあらず由二か今五六年を待ちていよ／＼見てみなしと知りしなば其時こそはこの花子世に毒婦惡女と呼はるゝか賢女烈婦と詠はるゝかいつれは咲かさん花一輪。

（完）

宇宙と人生及び靈魂に就て（其三）

黒岩周六君演説

此總て生きて居るものゝ一番もとは何であるかと申しますと云ふと、人間だの或は植物であるとか云ふやうなものを組織して居る所のものは、小さい粟粒のごく小さいやうな物でありますゝ之をセルと申しますが細胞と譯しまして細胞はどう云ふものかと申しますと、細肪の一番諸君に見易いのは是は水の中にありまするアミユバなどゝ申す小さい虫でございます、水一滴の中にどれ程澤山居るか分りませぬ、それはどう云ふ物であるかと云ふと一つの小さい粟粒である、粟粒の外へ妙なところもが掛つて居る、海月のやうな曖昧なところもが掛つて居る、粟粒の小さいと云ふとそれはどの位なものであるかと云ふと、水一滴の中に何千匹と居りますから、顯微鏡でなければ素より見えない、一分――一厘の何十分の一と云ふ小さい本當の芥子と云ふやうな物であります、それが水の中に居る、顯微鏡で見ますと四方八方へ指のやうな手のやうな足のやうな物を出して動いて居ります、此足な――別に足と云ふ形が無くつて或一部分シユドペツド、僞の足、噓の足と申します、足のやうな形を成して居る、此細肪が一つして動いて居るのを之を單細肪生物と言ひまして、それは生物のもう極下等なものでありまして、それから其單細肪生物と云ふものが自分獨りでは世の中に立つて稼いで行くことが出來ないから、食物を求めることが出來ないから外の細肪と繋がりましたのが複細肪動物と云ひます、複細肪動物と云ふものはどう云ふものであるかと申しますと、澤山の細肪が重つて、此細肪は手、此細肪は足、此細肪は頭と銘々に分業が行はれて居る、是が第二の複細肪動物であります、此複細肪動物が段々に進化して來て吾々人間となつたと云ふことは、もう言ふ迄もないことでございます。

所で吾々人間と云ふものはどう云ふにして活きて居るかと申しますと、吾々人間は其單細肪動物で拵えた一つの大きなる聯合體であつて、人間一人と云ふものは一人の生命でありますけれども、其實數限りのない動物が寄つてたかつて拵えて居る、人間の體には血がある、それから白い血があります所謂リンサーと云ふ、お醫者さんでは白血球と云ひますが其白い血の粒を取つて見ますと、アミユバと同じやうな一つのセルであつて、僞の足、僞の手を伸して、さうして人間のいろ／＼な處へ出て來て働いて居ります、此頃ある傳染病などゝ云ふものがあれが矢張り一つの單細肪動物のバチルスでありますが、それが肺の中に入りますと白血球が直ちに出掛けて行つてバチルスを食べて仕舞ふ、白血球が健全でありますればバチルスを食べて仕舞ふ、吾々が物を食ふ所から考へて見ても能く分ります、私が物を食べて胃の中でこなして仕舞ふとはどう云ふ事である、是は實にどうも吾々が知らない間に血になり肉になつて仕舞ふと云ふことは隨分不思議な事である、吾々は毎日さう云ふ事をして居るから不思議とも感じませぬけれども、どう云ふ工合で血になつたり肉になつたりするか、是は生理學者でも此頃まで非常な難問であつた、此頃まで唱へて居りましたのは胃の中へしみ込む、胃へいろ／＼な汁を分泌して來てこなして、こなれた物が胃の膜の中へしみ込むと云つて居りました、紙一枚を水にひたすと同樣に胃の中でこなれた汁が膜へしみ込む、斯う云ふことを言つて居りました、所が段々顯微鏡學が進んで來て胃の外面を成して居る皮と云ふものが決して皮ぢやない、細肪の一つ／＼の小さい動物が聚合つて口を揃へて四方に壁を成して居る、それでありますから食物が胃の中へ入ると我も／＼とぐるりのやつが食べて居る、胃袋一つにどれ程の動物が掛つて居ると云ふことは計算することは出來ない、一寸四方に何百万と入つて居る動物でありま

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

すから、胃へ食物が行くと其動物が食べて仕舞ふ、或は臓へ參りますと臓は臓てさう云ふ動物があつて考へる事もし、種々様々の働きをなして居る、人間の躰中總て動物の寄集りてあつて、吾々の平常職業をするのも吾々自らがするてはない、小さい動物が皆やつて居るので、吾々は小さな動物が集つて居る一つの大極てある、小さい動物が小極て人間と云ふものが大極である、此吾々と云ふ大極が小さい虫を知らず識らず支配して行きつゝある、小さい虫が胃の中で物を食ふことが出來るとした所が、吾々と云ふ大極が物を食べるから小さい虫が食べることが出來る、是が本當の腹の虫と云ふのでせう、昔から腹がすくと腹の虫がグウ〳〵啼くと云ふが腹の虫に違ひない、腹の虫と云ふ小さい小極を養つて行くには吾々と云ふ大極の力で養つて行くのである、それで人間其ものは一つの大極であつて、小極から見ればもう極々下等なる小さい虫の團躰である、斯う定義を下して置きまして、私は是から人生論と云ふ所へ入つて參ります。

人生は何物である、是はどうも今迄の學者が十分に説明したことがない、人生と云ふものは何か、人生と云ふものを能く考へて見ますと、是は丁度波のやうなもので、波は海の彼方から段々々々陸へ近寄せて參るのでありますが、此波を水だと思つたら違つて居る、波は水ではない、波を水でないと言ふのもおかしいが、木の葉が浮んで居るとしまして其木の葉は矢張り元の處にあつて波ばかりやつて來る、先の方にある水が押寄せて來るならば一つの木の葉は水と共に段々と押寄せて來なければならない、然るに木の葉は殘つて波ばかりやつて來る、此波は何てある、斯う考へて戴かなければなりませぬ、成程水だと考へれば大體に合點が行きますけれども水ではない、水は水、波は波て、波なるものは水の上を走つて居る一つの形てある、其形は何から參りますかと云ふと、或は矢張り何千年先の太陽から來るのであります、太陽の光が空氣を打つて重くしたり輕くしたり、空氣が動いて風が起り、其風が水を打つので形となつて現はれて來るので、水其ものが來るのではない、池の眞中へ一つの石を打ちますとパツと擴がります、是は水が擴がるのではない波だけが擴がるのである、さうするとどうしても波と水と同じものと云ふことが出來ない、波とは何ぞや水の上を走る一つの形である、斯う言ふより外は仕様がない、それて人生と云ふものを見ますと、人生とは何だ、人

生と云ふものは物質と云ふ一つの海の上を走つて居る波である、なぜ物質と違ふかと申しますと、波の進む所は水が立つて其波を形くる如く、物質の進む所は物質が人間の體を形くる、吾々が朝起きて物質を食べる、其物質なるものは胃の中へ入つて吾々になつて仕舞ふ、即ちお米を食べるとお米が吾々になつて仕舞ふ、お餅を食べるとお餅が吾々になつて仕舞ふ、おかしい様な話てすけれども吾々の體に口から通つて食べる時は素より物質であるのでありますけれども、其物質たるや吾々が食べれば吾々になる、犬が食べれば犬になつてワン〳〵と云ふ聲を出す、猫が食べれば猫の體になつて鼠を捕る、さうすると人間の形と云ふものは不思議ぢやございませぬが、豚を食べやうが猪を食べやうが牛を食べやうが、總て自分の體にして仕舞ふと云ふのが不思議だ、人間に限らず總ての生物が物質を食へは、豚なり猪なり皆自分の體にして仕舞ふ、是が即ち人生なんだ、人生は物質てはない、丁度波が水の上を走る如く、人生と云ふものは物質の海の上を走つて行く波で、波が走れば水が後へ下りて行く如く、人間が物質を食べても其物質と云ふものは口から入つて毛穴だの諸處の穴から後へ下りて行く、物質と云ふものは人間の體を乘越えて人間でないものになつて仕舞ふ、醫學者の説に依りますと人間の體は凡そ六七年にして物質が一變すると申します、是も事實であり、詰り今日の吾々の體はもう七年前の體ではない、又今より七年後の體とはまるて違ふ、今の體を組織して居る物質は糞となり尿水となり汗となり垢となり、種々様々にして體から去つて仕舞ふが、併ながら吾々と云ふものは依然として一つてある、さうしますと云ふと是て吾々と物質と違ふと云ふことが分つて居る、吾々の體は單に物質のみに依て組織されて居るのであるけれども、吾々と云ふ其ものは何だか知らないけれども、吾々と云ふものは物質ではない物質の以外に何かある、此物質以外に何かあると云ふのが是が即ち形であります、人間と云ふ形であります、形が一つある、眼から見た所では形と言ふより外に仕様がない、此形はどこから來た、詰り波が太陽に打たれて海のこなたから來ると同じことて、人間と云ふ形の波が物質のどこから來たかと云へば、或昔に於て太陽が波を打つ如くに、宇宙の大なるものが力になつて物質が段々押寄せて來る、其一番端は單細肪動物となり複細肪動物となつて、複細肪動物の中でも長形動物であるとか受胎動物である

とか脊髓動物であるとか、哺乳動物であるとか何の動物であるとか云ふ風に、物質の波が押寄せて段々大きくなつた、天然の力と物質の理が吾々まで來て居る、吾々は是から後どこへ行くか分りませぬけれども、兎にも角にも其あとを尋ねて見ると小さい物が段々と大きくなり、智惠の無いものが段々智惠がついて來て、何かなしに進んで居る、人間の先祖は猿だと申しますが、猿より人間の方が進んで居るし、猿の其前は何であつたか何れ脊椎動物であつたらうが、それよりも猿の方が進んで居つたに違ひない、それよりも前のものより又其方が進んで居ると云ふ風に進化して、私共昂上主義、上へ昂る主義は一つの大なる昂上主義である、此形を物に例へて申しますと丁度手に持つクラブと云ふ棒があります、始めが小さく段々大きくなつて居る、あのインヂヤンクラブの先の小さくならない益々開いて行くやうなものである、だから此社會て倶樂部と云ふ名をつけるのは尤もの事で、其點から言つてもベースボール倶樂部だの何の倶樂部だのと云ふが、人生は實に一の大なるクラブである、併し今の人の言ふ倶樂部ではない、棒の如きクラブであつて何處まで行つても大きくなつて人生の昂上主義である、さうすると何故に人生が昂上するかと云ふことが不思議になつて參りませうかと思ひます、それは外でもない人間の小極にある單細肪の力、此プロトプラズムから出來た其力が生活である、どこ迄も生活しなければならぬと云ふ一つの力を持つて居りますから、それが生存競爭をして段々と進んで行く、生存競爭と言ひますと動物自らの力のやうに誰も言ひますけれども、決してさうでない、宇宙の力が單細肪動物に籠つて生きなくてはならない、他の物になつても活きなくてはならないと云ふ生存の競爭を爲すものでありますから、獨りで暮すよりは動物の躰の如きものを造り上け、それて一團體となつて世の中に存生して居る、是が即ち吾々の人生と云ふものである。此人生と云ふものをもう少し深く入つて考へて見ると、人間の靈魂と云ふものは何であるかと云ふことが分つて來るのであります、人生と云ふのは兎にも角にも非常な力を以て昂上する所の形である、靈魂とは何かと申しますと人生が段々昂上してクラブの如く先が大きくなつて來る、其中に籠つて居る力が靈魂ではないか、之を近い所で考へて見ると吾々の心と云へば尚能く分る、吾々の心此心と云ふものは是も亦不思議なものでございまして、心を試験すると云ふことはたつた一つしか世の中に方法はない、それは何かと云へば自分の躰に入つて自分の心を見ると云ふことである、人の心と云ふものは決して分るものではない、心と云ふものは誰にもあるには相違ないけれども人に心があるや否や、人の心がどうなつて居るか誰にも分らない、自分の心だけが分る、人の分るのは何かと言ひますと人の動くと云ふのが分る、諸君がマア私を見ました所で、此黑岩周六と云へる者が心が有るか無いか分るものではない、黑岩周六自らに分るのみで諸君には黑岩周六と云ふ名のつく者が動いて居ると云ふより外は分らない、私から申しましても諸君に心があるや否や、私の言ふことが分つて居るや否やそれは分らぬけれども、何だか知らないが動くものがある、動くと云ふだけが分る、それて之を説明する爲に茲に一つの斷定を下して、外から見れば動く、内から見れば思ふ即ち心、外から見れば力である、内から見れば心であると云ふのが本當の心と云ふものゝ解釋である、それで彼の動くと云ふことは他から見て動くと云ふことで自分から見れば動くのではない、思ふのである、自分から見れば心である、隨分むづかしい議論でございますけれども、それて今日の學者が動くと云ふことをモーションと云ふものを定義として居る、モーション、イズ、マインド、動くと云ふものは心であると云ふ、是は今日の本當の定義である、此動くと云ふのは力であると云ふのは十九世紀の末に至る迄の解釋て、今迄の學説で説くと物質と云ふものは動くものではない、物一度止まれば止まつて動かず、一度動けば動いて止まず、何んでも置たならば再び外から來て押す迄動くものではない、他の力に依て動くと云ふのが今迄の引力の説であります、物質の説であります、今の説はさうでない、動くものとする、必ず動くそれが心だと云ふので、是はそう云ふことがないとしまするとコツプが落るのは何か、それは引力だ、引力は何か、地球から發する地球の引力は何から來るか、そこに至つて困る、地球が物を引く、斯う云ふことになりますならば、地球が物を引くと云へば引くと云ふことが即ち動くのではないか、引くのと動くのと違ふか、決して違ふ事ではない、地球がコツプを引くとすればコツプも矢張り地球を引く、コツプにも引く力がある、地球と引合つた上て地球の方が強いからコツプが落るので、若しコツプが地球より大きかつたら地球を引付けると云ふことは爭ふべからざる道理て、地球に

引力がある如くコップにも引力がある、コップは物を引く力がある、總ての物質が物を引く物を刎退ける、種々様々な力を持つて居る、若し物質が本當に死んだとして、動かないものであればどうして其力が出る、どうも物質か何か知らないけれども物質の中から力が出て來ると云ふのは、それは外から見れば動くのだけれども、物質の內側へ入つて物質自ら見た時には心と云ふより仕方がない、物質の力は物質の自力であつて、今迄の如く他から押されなければ動かないと云ふことはどうしても言へない、押されるとか引張られるより外に動く道がないと致しますと、さうすると引張る押すと云ふ力のごくの木の本へ行くと何處から來るか分らない、物質から出るのでございますから物質自ら力があると解釋するより仕方がない、其力が心である、物質に心があると云ふことはおかしい事でございますけれども、唯吾々人間の心と云ふものは、今日は細かな神經の組織に依て微妙に出來て居るから非常に働く、物質と云ふものは神經の組織も何にもない一本調子のものでありますから吾々の心と同一視することは出來ない、人間のやうな物を考へたり悲んだり何かする、非常に慾張りなどしたり狡猾なる心と同一視することは出來ない、物質の心と云ふものは單にそこに現れるだけのものであつて、吾々のごく〳〵元なんて心の色なのである、それを何に依て證明すれば一色なのである、それを何に依て證明すれば一番能く分るかと云ひますと、物質のみを專門に研究する所の理學者化學者の言ふ所に依て分けるより外ありませぬが、理學者の言ふ所に依ると云ふと、物をごく〳〵小さくした所の極微分子なるものは、鐵砲の彈丸が筒口を離れた速さよりも、万倍もする所の速さを以て常に震動して居る、是はもうどのやうな本にも書てありますから疑ふ所はないのでありますが、極微分子が震動すると云ふことは引力で震動するのか何で震動すのかそれは分らない、極微分子の性質なんてイーサーの壓迫に依て震動するなどゝ申しますがそれは分らない、非常な速さを以て震動して居るのみならず、或分子と結合して一體となり、それを離れては次の分子と結合して一體となり、開闢以來動いて止まないアトムの性質を持つて居る、アトム即ち物の根本の性質である、其アトムの動くのを動かさないやうにするにはどうしたら宜いかと學者が研究するけれども動かさない工風はない、唯熱をさますに限る、冷たい處へ入れて見ると段々々々動かなくなる、丁度人間が寒い處へ行くとかじかんで仕舞ふやうな道理で、今の所て攝氏の寒暖計で零點以下百七十三度までの寒さを與へれば總ての分子が動かなくなるだらうと云ふけれども、それだけの力はまだ出來ない、空氣を凍らせるなんと云ふ機械もあるが、併し百七十三度なんと云ふ絕躰冷へ持つて行くことは到底出來ない、百七十三度へ持つて行つたら動けなくなる、又此コップを叩くと音がしてピーンと響く、是は此コップの中に居る分子が衝突する音て、斯う云ふ堅いものゝ中に於ては分子がカチ〳〵衝突して響く、是よりも堅い鍛へ上げた鍊鐵でも叩くと微妙な音がします、叩いた後とまでピーンと響く、是は叩かれたので分子が一生懸命にカチ〳〵カチ〳〵かち合つて居る其音が外へ聞える、それは外から動搖を與へるから動くんだと云ふけれどもさうではない、縱しや人間がそれを叩かなくとも動いて止まずいつでも動いて居る、其證據はどこにあるかと申しますと物の色が證據でございます、物の赤いとか黃いとか白いとか云ふ色は、極微分子の微動が人間の眼に波動を及ぼして、是は精密なる寫眞の種板の如き物の波動でも色の波動でも皆波動でありまして、分子が一分間に何十萬と云ふ非常なる速力を以て動く、それが人間の眼には色に見える、兎に角色であると云ふことは認めて居る、外から行つて叩かうが叩くまいが躍つて止まない、其躍る調子が此社會に於て躍る調子も限りなく遠い星の面に於て躍る調子も足の拍子が揃つて居る、是等の事から考へて見ますと物の動くは物の自動である、物自ら動くのであると云ふことは爭ふべからざる事で、根本から動く性質を持つて居る、物の動く性質は何か、其物の心であると云ふより外仕方がない、なぜなれば動き方を二つに別けて見ますと、自分の好いた物と緊がると。嫌ひな物と別れると云ふ二つの、詰りアツトラクション、レペルシヨンと云ふたつた此二つが物の根本になります。

物を引く力があると致しますれば其力は或人を愛すると云ふ力と同しいてはないか、物を刎退けると云ふことを人間の心から言へば或者を惛むと云ふことゝ同じことて、決して其間に區別を立てることは出來ない、物の組織の程度の上に違ひがあるが爲に、物を物と引付けるのと、人間が仲が好くなつて互ひに引合ふ力と、それは程度の上にこそ違ひはあらうが其性質に於ては違ひはない、例へば彼のゲ

ーテの著はしてあります有名なハウストに、或若い所の女が或若い男と大變に愛し合ふなどゝ云ふことを化學的の親愛力に例へまして書てある、世界の人は皆之を傑作だと云つて感心して居る事柄であるので、分子と分子と相引く力とそれから段々込入つた力へ及ぼして來ると、人間間の愛情と分子のアットラクションとレパルションの區別をすることが出來なくなる、物質に於ては小さいやつが引たり嫌つたりするので、動物のごく下の單細胞動物ですら少し進んだ細胞には雄と雌とがあつて互ひに相引く、其引く力は分子と分子と相引く力と同じく、此單細胞動物の相引く力がもう少し進んで來ますと、男女の愛となりラブとなる、此男女のラブなるものを分拆して見れば人間の躰の中に籠つて居る所の男なる細胞と、それから女の躰に籠つて居る所の女なる細胞とが互ひに接近を求めると云ふより外は何等の說明を加へることが出來ない、物質の相引く力が段々進化して、吾々人間の愛情と云ふやうな細かい情愛までに發達して居ると思ふよりない。

（次號完結）

天然と人工

左琴女

縣會には既に幾度も、いつかは一度國會にと、六か敷希望もてる大やかなる男の方、或日我家に來らる。何くれの話しの序に、此人去年、長く連れそひて、子も多くある妻女に死に別れられたる事なれば、此頃は如何に御暮しあるかと尋たるに、イヤナニ先頃後妻を貰ひたり、是を貰ふについては、種々様々と考へたり、實を謂へば、去年先妻が死去の砌可愛相の事は實に可愛相なれど、子供の爲を考へては、反て是にて能くなりしかとも思はるゝ、何となれば御承知通り先妻は舊家庭に育ちたれば、裁縫の外には是ぞと云ふて出來る事なく、第一困るは子女教育、我地方の摸範と迄は行ぬとも、少しは人に知られし我家、せめて後指さゝれぬ程には育たし、然るを先妻にては此事望むも甲斐なき事と、始終の掛念は此事なりしに、今憶なく死たるは、彼の爲には實に氣の毒なれど、子供の上には不幸が幸になりたる樣なり、此上は、當世流の教育受たる娘を探しだし、美事に家庭を改良せんとの希望滿々したりしが、親籍の者多く舊志想にて、左樣に新教育受けたる人を迎へては男子の側は兎も角も、婦人連の折合甚だ宜しかるまじ其結果御身の家には誰も〳〵鼬の道切、斯くては折角の良家庭も、香ばしき匂ひは放つまじ、先夫よりは亡妻の妹、穩和の氣質が何よりの取所、第一佛も滿足なり且は子供も嬉ぶよと、質實なる勸に、異存云ふべき年でもなく、終に其妹を貰ひたり、お蔭で家庭は元の默阿彌、何事も理想のまゝには行ぬものとの述懷なり。

扨も〳〵、世には奇說も珍談もあるものかな、假令其亡妻な

（三六八）

る人、一年三百六十五日に、破衣ひとつ繕はぬ横着者なりとも、假し又、三百六十五日、ニッとも爲ぬ無愛嬌者なりとも、其子の爲には天上天下、是に上越す母親やある、凡母子の間は暫く個々に別れあるとも、元々一躰が、自然の理にて、二個とも三個とも五個とも八個とも、別れゐるばかりなれば、眞に幹と技とに外ならず、然れば實母が實子を愛する事は、其心の内に別に、子と云ふ可愛者が有て、之を態々愛するにあらず、譬へば我身躰の内にて若し指さらば、此指其身躰の外の部分より一番心掛りなり、心掛りは則可愛ゆし、若し又今日は耳が痛ければ、けふは耳が一番心掛りにて、又一番可愛し、此理によりて母の子を愛する事は能く判るなり、個々に別れ有ても、元々同躰なる我子なれば、我身も同じ事にて、則ち我の最も纎弱なる部分なれば最も心掛りにて最も可愛し實に切ても切ぬとは此事にて長よりは幼賢よりは愚を愛すると云ふも此理の外なし、實に自然天然なり、然れば其子の實母ならば、彼の横着者も、不愛嬌者も、夫以上の棄り者も、天上天下此人獨りが尊きなり。

然るに今此男、この大切の母を失ひたる、子の上を思ふて憐まぬのみか、何か光明を見出したる如きおもひを起したりとは、心の闇に彷徨ひて狐火などを見出したるにや、假令育兒法何年、敎育學何十年修學なしたる立派の婦人來たればとて、是は人工、其子に合ふやら合ぬやら、又何時毀れるやら損じるやら案じるにかぎりもなし、之を實母の愛の表よりは裏が能く、晝よりは夜が深きに準べき者にはあらず、然るを此人の如く止事を得ぬ死別にも無きに、世には惜げも無く天然と人工を取代へて、人工の甚だ妙ならぬ事を云ひて打騒ぐ、既に因を謬り何として果の美しからんやと、謂たくあれど、此大やかなる男の方に、我將何をか謂るべき、ホンに能こそ親籍の注告を入れられしよ、育兒敎育何程學びても、學びし事は申さば術なり、術とすれば行たり行なは無つたり、果して術を行ふか行はぬかなど、左樣に氣骨のをれる人よ切難き血筋の緣ある妹御こそ、後妻として最適當なる人ならん、萬事の不足は抛て、唯只管に御睦あれなと、我云へば、流石に頰の邊に微笑は見ゆ、斯れば滿更不足ばかりでは無き後妻なるべし、とは謂へども、彼の子供の上には天然と人工の入代へなれば、此事に付ては、良人も後妻なる人も、隣人も親籍も、

豫てよく〳〵心得あらねば、後の障り多かるべし、然れど此事夢にも聞せたく無は其幼き子等の耳になり、出來得べくは、唯いつまでも〳〵。

定見深睡錄

(三)海外事業の爲め親子別居論　佛蘭西人の植民事業が遂に永續せぬは、ゆく先に家庭の無き爲め。英吉利人の植民事業が最後に大成功するは、ゆく先に家庭の出來る爲め。家庭の有無が植民事業に大いなる關係あるヿは、今更ら申す迄もなきヿ也。然るに、我國人の海外事業の爲に出掛る時は、いつも妻子を後にのこし、喩へば出陣するかの躰裁にて遠征する故、其の一時の元氣は豪なるものなれど、永續しがたし。すべて元氣によつて爲せしヿは永く續かぬものにて、平心常情によりて平氣に爲すヿならでは永持のせぬゆゑ也。識者之を憂いとし、海外にゆく時には妻子を連れゆけよと絶叫し、色々に勸告するものあれども、容易に行はれず。或人は、錢が掛る故と言ふものあれど、海外に於る婦人の仕事も澤山にて、錢のかゝる丈の收入なしと言はず、況して、夫々の手當あるものなどは、夫人同伴したりとて夫丈の維持は出來べき筈也。尤とも、夫人同伴の手當甚はだ少しと言ふものもあれど、比較して申さば、決して薄しとは言へぬヿ也。又、或人は、女子に教育なくして、遠征を大相の事に思ひ、氣車に乘るすら、よい勝にて舟には迚も乘りがたしと言ふものあれど之が爲めに女子の外行の行はれぬとは思はれず、女は男に同伴して初めて氣丈夫なるもの故、良人のゆく所ろ即はち安宅なり、車なり舟なり一時の恐れによりて同行を避くるヿは決して無きヿにて、之は男子が女を家にのこす時の言ひ譯にすぎざるべし。左らば、何故に婦人同伴の外行が今少し行はれぬ乎と言ふに、こゝに人情の機微ありて存す。

試ろみに、外國人の旅行に是非夫婦同伴するは何故ぞと問へ、其原因には樣々あるべく、女の元氣よきヿも一つの元因には相違あるまじけれど、決してそれ計りにはあらず。凡そかゝるヿが最後の動機とはなりにくきもの也。人間の爲す最後の動機は意外の所ろに存ず、この動機によつて動き乍ら、理窟は別に勝手に附會し、人前に美くしく、道德にもかなひたる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

樣に申すとなれど、尤とも有力なる無意識の動機は決してかゝる立派の事のみには存せざる也。左りとて、人は自から恥づるほどの卑しき動機によりて活動するとは意識するとなしかゝる意識に安んずるとなし、故に人に對して都合よき辯解を爲すのみならず、自己の良心に對しても又相應の辯護を爲し、良心が納得するほどの理由の上よりしていろ〳〵の事を爲すものなれど、左りとて一種有力なる其動機が之に一致和合する塲合ならねば、物はなか〳〵に行はれぬもの也。

かゝる動機のあとをしにようざる耳ならず、之に逆行してさへ理想的の事を爲すやうなる上根の人はあまり多くは無きものにて、かの滔々たる外國人の夫人同伴にかゝる立派なる原因よりして行はれたりとは思ひ得べくもあらず。

左らば、何によつて斯く廣く行はるゝに至りし乎と言ふに、實は、妻をひとり家に殘すとの心配せらるゝ故也、又、妻に於ても、良人をひとりやるとの心配になるとある也、就中、男の方にて其の杞憂特に多き故、さてこそ何處にも夫人を連れゆくと也。

然るに我國にては、姑舅と同居の仕組にて、良人外出の留守宅には、妻のみならず老父母同居して監督しつゝある故、男子の心中、西洋人の心配する如き心配は無きと也。故に此の心配に刺激せられて妻はゆく先につれ行く如きとも自然と行はれざる也。

故に親子の別居は意外の所に影響あり。是迄、親子別居論を主張したるは、主も家庭平和の上よりなれど、斯ては老人を疎外にすると聞え、何となく古風の孝子の安んぜざる所なれば、此論余り行はれざりしが、凡そ日本男子いよ〳〵海外に事多く、妻子同伴して出ゆかねば成らぬとにて、良人不在中ヨメが良人に代つて姑舅に仕ふるとも出來まじき故、平生より別居し居るに如かず、即はち別居風に家を計畫し置くに若かずと云ふの議論こそ行はれしめたきものなれ。而してこの論によつて暗に彼の事を遂行せしめたしと言ふものあり、其策是非如何ん。

樂友社同人著

◎◎◎◎五版發賣

名媛唱歌

〇華族女學校學監下田歌子女史序文
〇女子英學塾長　津田梅子女史序文

袖珍洋裝頗美本
實價金二十錢
郵稅不要

容內曲歌

〇神功皇后　〇加賀千代
〇松下禪師　〇山内一豐妻　〇春日局
〇紫式部　〇清少納言　〇小督局
〇淺岡局　〇大政所　〇難内侍
〇女學生　〇靜御前

◎◎◎◎再版發賣

東京音樂學校講師高折周一先生作曲
音樂之友編輯主任今村九穗先生作歌

國民唱歌　海國男兒

一冊三錢
五十部以上二錢五厘
百部以上二錢
郵稅一冊二錢五十部以下は不要

東京音樂學校講師前田久八先生作曲
東京音樂學校講師旗野十郎先生作歌

歷史唱歌　扇の的

目下製版中

發行所　東京市下谷區徒士町三丁目七十二番地　樂友社

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂

故若松賤子女史譯述

第九版

小公子

全一冊洋裝美本紙數三百五十頁正定金卅五錢郵稅八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝ數十百回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一小年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。此書初て世に公にせらるゝや、譯文の巧妙を以て一時に噴傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀曉に徹し遂に卷を釋る能はざりしと云へり。英學新報又云ふ世の英文和譯を學ばんとするもの之に優るの余師なしと同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京巣鴨村庚申塚　女學雜誌社

嚴本かし子文集

忘れ形見

洋本美裝一冊六百八頁
正價一圓

目次

忘れ形見　　雛嫁
せーらくろー物語　　我宿の花
波のまに〳〵　　いなつくあーてん
入學前　　ひろひ兒
林のぬし　　棄て蹄
邪推　　榮公の誕生日
淋しき笑　　病母と小伜
砂糖の罪可　　着物のなる木
けんつく踊　　黃金機會
ろーれんす　　女房滿說
お向ふの誰れ　　おもひで

以上

發兌元　東京堂

大賣捌　女學雜誌社

女學雜誌第五百二十一號
（明治卅六年九月十日發行）（毎月二回十日廿五日）

曲亭馬琴の齒磨

ライオン齒磨

花にたはぶれ、杖に伏しまろびげにも上なき獅子王のいきほひ、なびかぬ草木もなき時なれや。萬歳千秋と舞ひをさめ、萬歳千秋と舞ひをさめ。獅子の座にこそなほりけれ。

ライオン齒磨

明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY